

イスラエル巡礼の旅

エマオの旅人

この度、コム・ユニティワールド企画の「イスラエル巡礼の旅」7日間（3月23日から29日）に夫婦で参加しました。海外巡礼の旅は、2回目でしたが、強烈な印象と体験をすることができました。

参加者は14名、神父様と添乗スタッフを加え総勢16名で、韓国インチョン空港に集合、大韓航空直行便でテルアビブ・ベングリオン国際空港に23日中に到着できました。7時間の時差が生かされました。

テルアビブに一泊、翌日から文字通り^{聖なる}THE HOLY LANDの巡礼に出発しました。地中海沿岸沿いに北上、ローマ帝国時代の遺跡の残るカイザリアは、あの総督ピラトも滞在していたとか、あるいはパウロがローマに引き立てられて出航した港でもあるとか、一挙に2000年前の世界に誘われました。

そして、カナンの地、小高いメギドの丘（アルマゲドン＝「ハルマゲドン」と呼ばれる所に、王たちを集めた：ヨハネ黙示録16-16に出てくる）にはソロモン王時代の巨大な砦跡、有名な「ソロモンの厩」などあってさらに3000年前に引き戻されました。メギドの丘の北には広大な平原が開けています。メギドの丘の北西に標高約550メートルのカルメル山が、地中海に向かってせり出しています。旧約聖書の「列王記上」で預言者エリアがバアルの預言者たちと対決し、勝利したことで知られる山。山上には修道院があり、巨大なエリアの像が立っていました。そのカルメル山展望台からは、東の方向にナザレのあるダボル山、西ガリラヤの遙か北東には、約1200メートルのメイロン山を含むレバノン高地、その遙か彼方に約2180メートルのヘルモン山まで見られるとか。山腹のそこに、イスラエルの国花であるシクラメンの花が咲いていました。

カルメル山の北西端の地中海に突き出たところに美しいハイファ港の市街が開けます。地中海沿いにすぐ北には、前述のレバノン杉のレバノン、かつてのフェニキアがあります。ハイファ湾を挟んですぐ北に、アッコーの町が見えましたが、紀元前16世紀にはすでにフェニキアの港湾都市として繁栄していました。現代の紛争地近くとは思えない真っ青な空と海、地中海ブルーは忘れがたいものでした。

ハイファには、19世紀中葉イランに起こったバブ教から転化したバハーイ教の本拠地があります。地中海に面した山腹から麓の広大な傾斜地に花咲き乱れる美しい庭園があり、海岸べりにバロック様式の豪華な廟がありました。

ハイファは豊かな美しい港湾都市で、今回訪れたイスラエルの他の街とは異質な印象を受けました。ユダヤ教以外の宗教施設がたくさんあるとか。

海岸べりにあった、海の星（ステラ・マリス）教会で巡礼第1回のミサに預かりました。

ハイファから東進、ガリラヤ湖の地域に入ります。キリストの初期暮らされ、福音活動を始められた地域です。湖畔の街ティベリアに着き一泊。

翌日 25 日は、ユダヤ教の安息日、まずカナの婚礼教会（聖フランチェスコ教会）に。その地下にイエスが水をワインに変える最初の奇跡を行われた遺跡を見ることができました。ここで、**The Wedding Sanctuary**(結婚確認書?)が一行に与えられ、夫婦参加の私たちがいただく幸運に恵まれました。

カナから少し南に離れたナザレへ。イエスの幼少期から福音宣教の生活に入られる(30 歳頃まで)過ごされた 400 メートルほどの山に広がる街に受胎告知教会がありました。

1969 年に完成した中近東最大級のモダンな教会で、世界各国からの大勢の巡礼者が集い、折から行われたミサに参加することができました。教会内部の左壁面に、長谷川路可の「華の聖母子」が掲げられていました。ご聖体を受け、感謝感激でした。

聖ヨセフ教会では、現在の教会の下にビザンツ時代の地下の礼拝所があり、ワインを作っていたサイロなどが残っていました。ヨセフがイエスとともに大工の仕事していた場所は、さらにその地下にあるのでしょうか、歴史と時間が地層になっていることを実感しました。

ナザレからティベリアに帰る途中、大渋滞に巻き込まれました。カナの市街で、昨日のカルメル山から見られた、北のシリア国境、ヨルダン川の水源でもあるヘルモン山から珍しい雪が運ばれ、それを見る人で混雑したのが原因でした。

再びガレリア湖畔に戻り、北西岸のカファルナウムへ。今は遺跡のみですが、いわゆる「ペトロの家」の上に何層かのシナゴークの遺跡が残っていました。シナゴークを含め石造物遺跡の巨大さに驚きました。イエス・キリストのガリラヤ伝道の本拠地でもありました。

カファルナウム近くの船着き場で、帆船に乗りティベリアまで小一時間、船旅を楽しみました。湖をわたる風は心地よく、湖畔の緑は美しく花咲き乱れていました。東には中東戦争の現場となったゴラン高原が屏風のように続いています。ガリラヤの地では、ユダの荒野もネゲヴ砂漠も想像が付きません。船頭？さんの一人が網打ちのパフォーマンスをして、キリストの時代を彷彿させてくれました。

26 日は、ガリラヤ湖の北西岸、小高いエレモス山の「山上の垂訓教会」へ参りました。フランシスコ派の美しい教会の庭の一角で旅行 3 回目のミサに預かりました。昨日同様の好天のもとでのミサ、マタイ 5 章の山上の説教の一語一語をかみしめておりました。

「心貧しい人々は幸いである、天の国はその人たちのものである。」
キリストとともにあることを実感した一瞬でもありました。ガリラヤ湖の眺望は素晴らしく、私たちも「ガリラヤの風かおる丘で」みことばを聴いたのです。

エレモス山を下り湖畔タブハに、まずイエスとペテロ出会った場所に建つ、ペテロ首位

権の教会を訪れました。側の木の下に、二人の像がありました。

続いて「二匹の魚と五つのパンの奇跡」の教会へ。ベネディクト派の修道院で、開門が10時きっかりとかで、行ったときにはまだ閉まっていたしばらく待たなければなりません。教会内部にはビザンチン時代の美しいモザイクが見られ、周辺には真っ赤なブーゲンビリアが咲いていたのが印象的でした。

キリストが山上の説教を行われたところは、この二つの教会の少し山に上がった所でないかとされていました。この野山に当時としては、5000人という大勢の人が集まり、キリストの話を聴いた様子を想像し、大変なことだったと思いました。民衆は奇跡や現実的なローマへの抵抗を期待し、キリストは神への崇敬を説く、その乖離が表面化する前の出来事だったのでしょう。

いよいよ、ガリラヤに別れを告げ、ヨルダン川沿いに南下しました。途中、イエス・キリスト洗礼の場所とされているところに立ち寄り、ヨルダン川を初めて見ました。幅20メートルほどの川でした。少し濁っていましたが水量は多く、まさに貴重な恵みの水をたたえ、多くの魚が泳ぐ姿が見られました。

ヨルダン峡谷を南に緩やかに下るにつれ、周囲の景色が一変して行きました。「ユダヤの荒れ野」です。東岸は隣国ヨルダンです。ゴラン高原の延長で3、400メートルの高原が続き、アンマンもすぐ近くです。

キブツにより、ナツメヤシが植林されていましたが、死海に近くなれば、さらに乾燥した殺伐とした景色が続きます。死海の北岸近くの町エリコに到着、レストランで昼食。

エリコは、海拔マイナス260メートルのオアシスの町、世界最古の町とか言われています。重要な食糧源の棕櫚(シュロ)の生い茂る地、旧約聖書によれば出エジプト後、モーゼの後継者ヨシュアの時、シナイの砂漠からやっと辿り着いたのがカナンの地エリコでした。ヨシュアの指揮下、「エリコの戦い」で攻め落としました。

キリストとは、「徴税人ザアカイ」の話がこの地でのこと。「ザアカイの木」(イチジク桑の木)といわれているザアカイがイエスを見るために登った古木がありました。

エリコの町は時間の関係で通り過ぎざるを得ませんでした。ただ町の中心から北西2キロメートルほどの地に何層にも積み重なった遺跡の丘があり、その先に荒々しい急峻な山が眺められました。バスを止めて眺めるだけでしたが、それが、イエスの40日間断食をし「悪魔に試みられた誘惑の山」でした。ガリラヤの風薫る地との対照が際立ちました。

山の中腹までロープウェイが設置されていましたが、中腹に洞窟が掘られ修道士が住み着いたとのことで、ギリシャ正教会の修道院もあるとか。同じような風景を中国の敦煌でもみましたが、敦煌の地も砂漠でしたが、曲線的なやさしさがありました。自然の荒々しさという印象では、砂より礫岩の荒野で比較にならないと思いました。

エリコを後にしたバスは、東への山岳地帯を登り、一路エルサレムを目指します。途中の峠から死海が見られましたが、荒涼とした景色でした。死海、その沿岸の死海文書のク

ムラン遺跡、マサダ砦跡には今回行けませんでした。日程的にも無理でした。

ヨルダン峡谷は、海拔マイナス 212 メートルのガリラヤ湖から、海拔マイナス 424 メートルの死海に続く 90 キロメートルの地溝帯です。今回の旅で、それが人類発祥の地と言われるアフリカ大地溝帯の延長線にあることを知りました。緯度的には日本の鹿児島から屋久島あたりになりますが、地勢的に特異な地であることを考えると歴史的に随分古い地で、創世記が書かれるにふさわしい地なのかなと思いました。ちなみにエルサレムの街は、海拔 800 メートルです。エリコとは 1060 メートル、死海とは 1214 メートルの標高差です。

エルサレムまでの道は立派な舗装道路でしたが、道の両側は荒野ないし砂漠が続き、時々ベトウイン族のヤギを追う姿が印象的でした。イスラエルは、ユダヤ人、ユダヤ教徒だけでなくアラブ、イスラムの人たちも共存する国であることを知りました。そういえば、村々にモスクの高いミナレット（塔）を数多く見たことを思い出しました。

海拔マイナスのユダの荒野から山岳地帯に入ると、行きかう車が増え荒涼とした景色は一変し緑濃い景色が広がり、山に這いつくばるように石造の家が見られます。やがてエルサレムの新市街に入っていました。エルサレム周辺は、車の渋滞が激しいようなので、迂回してエルサレム旧市街から西南 8 キロのエン・カレムに寄りました。

夕方に着いたエン・カレムでは、まず小高い丘の上の糸杉に囲まれた美しい訪問教会に参りました。階段を登って行かなければなりませんでした。メンバーのご婦人が、疲れで体調を崩され途中で倒れました。付き添いで残られる方がいて巡礼旅行なればこそと思いました。

訪問教会は 4 世紀にビザンチン様式で建てられたものが原型で 1679 年フランシスコ会のものになったそうで、建物は 20 世紀初頭に建てられたものでした。

ルカ 1 : 39 - 56 の「マリア、エリザベトを訪ねる」の福音を記念した教会で、教会内部には、エリザベトが幼児であったヨハネの命をヘロデの刺客から守るために、ヨハネを隠したといわれる岩があるとか。見ることはできませんでした。

「あなたは女の中で祝福された方で胎内のお子さまも祝福されています」「あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子はよろこんでおどりました。」

訪問教会を後にして坂をくだり、時計塔のある洗礼者ヨハネ誕生の教会に参りました。ルカ 1 : 57 - 79 洗礼者ヨハネの誕生、ヨハネが生まれた洞窟の上にこの教会は建っていました。キリストに先立つ預言者であり、キリストのユダの荒野での修行も、ヨハネのもとで行われました。私たち一行以外、訪問者はなく静かな雰囲気を楽しめました。こちらもフランシスコ会が管理していました。

エン・カレム訪問で、ガリラヤからエリコを経ての長い一日が終わりエルサレム新市街のホテル入ったのは午後 7 時前でした。

27 日はいよいよエルサレム旧市街に入りましたが、新市街を抜ける路の両側は、美しい街並みでした。英国の委任統治下で、石造以外禁止されたのが今も受け継がれたお陰とか。複雑な思いで街並みを眺めました。

高い城壁に囲まれた旧市街には、西のヤッフォ門から入場。ヤッフォ門とは、テルアビブの南方の港、ヤッフォからの荷物を運び入れる門として活躍したにちなんでいるとか。門を入ったところはアルメニア地区で、石畳の道を通って朝の聖墳墓教会へ参りましたイエス・キリストが十字架に架けられ、葬られたとされるゴルゴダの丘に建つ教会です。この日は、聖墳墓教会でのプライベートミサに預かるために参ったので、重要な聖地部分は素通りしました。

質素な御堂の一つでのミサの福音朗読は、ヨハネ 4 : 43 - 54 「役人の息子をいやす」の部分でした。役人とはガリラヤ湖畔のカファルナウムの王の役人で、秘跡を行われたのは、あの結婚式のカナでした。まさにキリストを身近に感じた瞬間でした。

ミサ終了後、その日はエルサレム旧市街（ダビデの町）を出て、東の深いキドロンの谷を挟んで位置するオリーブ山に登りました。

オリーブ山の頂上付近の展望台から、ダビデの町、シオンの丘が一望され、「これがエルサレムか！」と感動の景色でした。巨大な黄金の岩のドームが、威容を誇っていました。

八角形の昇天教会の内部の岩には、キリスト昇天の足跡あしあとが残されていました。オリーブ山の頂上に、主の祈りの教会がありました。ビザンチン風の建物で、ローマ皇帝コンスタンチヌスの母ヘレナが建てたものがはじめとか。ルカ 11 : 1-4、マタイ 6 : 9 - 13 「主の祈り」の各国語の銘板が掲げてあり、無論日本語も見ることができました。

オリーブ山をキドロンの谷に向かって急な坂を歩いて下りました。途中、中腹付近からユダヤ人の広大な墓が続きます。土葬で、メシアが現れ、再生・復活の時、起き上がってエルサレムに向かって歩けるように、足を西のエルサレムに向けて葬ってあるとか。古い地層の洞窟も散見されましたが、共同墓地のようでありました。

「主の涙の教会」も途中にありました。ルカ 11 : 41-44 キリストがエルサレム入場直前のエピソードのように書かれています。

オリーブ山を歩いて下るのは、足の悪い私にはなかなか難儀でした。かつての道はすべて、石畳で、長い間人が歩き表面がつるつるになって滑りやすくなっていました。急坂なので恐る恐るでした。キリストはどのように歩かれたのか？ロバに乗られたのはどのあたりだったのだろうかとか想像しながら下りました。

下ったところ、オリーブ山の麓付近にゲッセマネの園、万国民教会があつたが、翌日に寄ることにして、昼食後エルサレム南方 10 キロのベツレヘムに向かいました。

ベツレヘムは、パレスチナ自治区になるため、イスラエル人のガイドはエルサレムに残り、バスのドライバーのみで検問所まで行きました。ベツレヘムの検問所でバスをアラブの小

型バスに乗り替え、同時にアラブ人ガイドが乗り込んできました。しばし緊張した雰囲気になりました。日本語は通じず英語での説明になります。

エルサレムと違ってごみごみした感じの街は、巡礼者が多くて道路は大渋滞でした。

巨大な石造の建物の生誕（降誕）教会は、ローマ・カトリック教会（フランシスコ会）、東方正教会、アルメニア使徒教会が区分所有しているとのことでした。

コンスタンチヌス 1 世時代、母ヘレナの尽力で、イエス・キリストが生まれたとされる洞穴の上に聖堂建設が始められ 339 年に完成しました。6 世紀には、火災で失われモザイクの床が残ったとか。ユスチアヌス 1 世時代に再建され、基本的にはその聖堂が残っているということでした。

さすが 1500 年近い時を経た聖堂は、いたるところ修復工事が行われていました。キリスト生誕の洞窟の中には長い列をなして順番を待たなければなりませんでした。

韓国、中国、東欧、米国の巡礼者が多いように見えました。

順番が回ってきて、洞窟に入るとキリストが生まれたとされる場所に銀で星の形がはめ込まれた祭壇があり、思わず膝まづき手で触り、口づけをしてしまいました。この旅行中最もキリストを間近に感じた瞬間でした。

祭壇の反対側には揺りかご？が置いてあり、幼子イエスを寝かせたところということでした。洞窟を出て、創建時のものというモザイク、聖ヒエロニムスが籠って聖書のラテン語翻訳をしたとか言われる洞窟跡なども見る事ができました。

生誕教会に隣接して、カトリック系の聖カテリーナ教会、フランシスコ派修道院がありましたが、ベツレヘムはダビデの出身地であり、旧約聖書の時代から、この町から救世主が出現すると信じられてきました。そんな由緒正しいベツレヘムで誕生したのがイエスでした。

生誕教会がキリスト教各派の区分所有と同様、エジプトのコプト正教会、エチオピア教会、ルター派、シリア、レバノンのマロン派などが教会を建てているそうです。ビザンチンの影響と初期キリスト教の色々な流れがこの町には残っているように感じました。

現代のベツレヘムは、アラブ人の町で、アラビア語が話されキリスト教徒はわずか 1 パーセント。2012 年世界遺産登録が実現、世界中から来るキリスト教巡礼者を迎え、ガイドするのはイスラム教徒という現状に皮肉な歴史の現実を感じたりしました。

ベツレヘムでは、この巡礼旅行の「コム・ユニティワールド企画」の関係しているミゼルコルディアのベツレヘム支社？に寄ることができました。パレスチナ自治区で、医療提供のボランティア活動施設でした。イタリアの本部から医師が派遣されているとのことでした。

ベツレヘムで最後に寄った、アラブ人の土産物屋で家内に高価なネックレスを買ったのはベツレヘムで、アラブの商人から買うことに意味があるように思えたからでした。

パレスチナ自治区からイスラエルに入るには厳しい検査があるので、ユダヤ人のドライバーは迂回路を通過して検問所を避けてくれました。バスの窓から見えた延々と続く分離壁

には、それまで余り見えなかったイスラエル、パレスチナの対立関係を認識させられました。

途中でユダヤ人ガイドの人を再びバスに迎え、ホテルに帰りました。

ホテルで最後の夜、パレスチナ自治区でボランティア活動をしている方が同行の神父さんを訪ねて来られました。アラブの女性たちとバックの製作などしていて、その製品を見せてもらいました。なかなかしっかりした織物だったので私も、二品購入をしました。アラブ風の模様でフェアトレードでしたので結構高価な買い物でした。

翌 28 日、巡礼旅行最終日です。荷物を作ってホテルを早めに出発、まずエルサレムから西方の 11 キロ離れたエマオという集落跡に行きました。「湯が沸き出る場所」という意味の地名だが、中東戦争で激戦地となったラトルン近く、北のサマリア、東のエルサレム、西の地中海、南のネゲブ砂漠の十字路に位置しています。今は石造のビザンツ教会＝バジリカ式聖堂跡、ローマ式浴場跡などが残っているのみでした。ここでも、3 世紀のビザンツモザイクなども観ることができました。

ルカ 24 : 13 - 35(マルコ 16 : 12 - 13)「エマオで現れる」、クレオパともう一人の弟子が、すっかり落胆した様子で「エマオという村に向かって歩きながら」「(エルサレムでの)一切の出来事について話し合っているところに」「イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。」のがエマオ近くでした。エマオで宿を取り、一緒に食事の席について、「イエスがパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった」とき初めて二人の目が開け、復活したイエスだと分かります。その時にはイエスの姿は見えなくなり、二人は時を移さずエルサレムに戻ります。復活したイエスが最初に、姿を現わされたのがエマオなのです。

エマオを後にして再びエルサレム旧市街に向かいます。エルサレムへの道は、朝のラッシュアワー時なのか車の列が続き渋滞に巻き込まれました。

エルサレム旧市街を通過して、南のシオン門からシオンの丘に出、東の松林に囲まれた丘の上にある鶏鳴教会に参ります。

ここからは、南にかけてのダビデの町の遺跡やヒンノムの谷が、東には昨日登ったオリブ山、キドロンの谷が見渡せます。

鶏鳴教会はユダヤ教の祭司カヤバの屋敷跡、ゲッセマネで捕らえられたイエスが石段を通過してここに連行され、地下の牢獄に留置され最後のひと晩を過ごした場所でした。

イエスは、ここから総督ピラトのところに連れていかれ裁判を受けたのでした。

弟子のペテロが、イエスの予言通り、鶏のなく前に 3 度「イエスのことを知らない」と言ったのは、この大祭司の屋敷の中庭のことでした。ルカ 22 : 34、54 - 62 他

鶏鳴教会の中庭から東への石の階段は、19 世紀に発掘され 2000 年前のものであると確認

されているとか。イエス様がゲッセマネからキドロンの深い谷を越え、この丘の上まで連行され歩かれた道を実感しました。

地下の牢獄跡の深い洞窟も観ることができました。

鶏鳴教会で、巡礼最後のプライベートミサに預かりました。

その日朗読された、ヨハネによる福音は、「ベドサタ」の池での病人を癒す話。

安息日に秘跡を行ったことを口実にイエスをユダヤ人たちが迫害しはじめた個所でした。

鶏鳴教会を出て、西に向かって行くとダビデ王の墓のある建物の裏の階段を上った 2 階にイエスが使徒たちが、一緒に最後の食事をしたとされる部屋がありました。

イエス復活の後、また聖霊降臨の日、使徒たちが集まる場所でもありました。

現在の建物は十字軍が建てた建物で、入り口の建物には十字軍の印象が刻まれていました。

その後は、フランシスコ会修道院になり 1521 年まで続きましたが、イスラム教徒に占拠され、19 世紀までキリスト教徒は立ち入ることができなかったそうです。

最後の晩餐の部屋の建物のさらに西隣に、ベージュ色の美しい尖塔ののそびえ建つマリア永眠教会がありました。イエスの母マリアを祀^{まつ}って建てられた教会で、地下聖堂には、桜の木と象牙で作られた永眠するマリアの像が横たわっていました。美しいモザイクが聖堂の壁を飾っていました。

シオンの丘から、昨日行けなかったオリーブ山北西麓のゲッセマネ(オリーブ油搾り場の意味)の園と、万国民の教会に寄りました。オリーブの古木の立ち並ぶ園にこの身を置いて、最後の晩餐を終えたイエスと弟子たちがゲッセマネに来て、弟子たちから少し離れられたイエスは、三度、苦しみの祈りをささげられたことに思いめぐらせました。

そして、イスカリオのユダの裏切りによって、イエスが捕らえられたのもこのゲッセマネでした。

オリーブの古木の何本かは、背は高くありませんが、幹のまわりが数メートルの巨木でした。ユダヤ戦争の後、ローマ軍によって焼かれたといわれるが、キリストの時代から生き延びているらしく、屋久島の縄文杉のことを思い出しました。キリストたちを見ていたのかも。

マタイ 26 : 36 - 46、マルコ 14 : 32 - 42、ルカ 22 : 39 - 46

同じ敷地内に建つ万国民の教会は別名、苦悶の教会ともわれ、4 世紀に建てられたバジリカ様式の聖堂です。祭壇の前には、イエスが祈ったという岩の一部が置かれていました。

現在の教会建物は、1919 年に再建されたものでした。壁面にはビザンチン様式のモザイクが施されていました。

北隣にはマリアの墓の教会があり、南隣のロシア正教の教会であるマグダラのマリア教会は、金色の玉ねぎ型のドームが輝いていました。どちらも外から眺めただけでした。

エルサレム旧市街のキリスト教地区、ローマカトリック教施設のレストランで昼食の後、城壁をぐるりと回って聖ステパノ門(この門の側^{そば}で石打ちの刑に処せられた、最初の殉教者聖ステパノにちなんで呼ばれる)、別名ライオン門からムスリム地区に再入場しました。

聖ステパノ門を入れてすぐの右手に聖アンナ教会があります。

聖母マリアの両親ヨアヒムとアンナはエルサレムの神殿の近くに住んでおり、この教会の敷地内にある洞窟がその住居で、マリアもここで生まれたとされています。

教会は5世紀頃建てられ、後にペルシャによって破壊されたましたが、12世紀に十字軍により再建され、聖アンナ教会と名づけられたとか。

この教会の聖堂もバジリカ様式で、非常に音響効果がよいとのことで、私たち巡礼者一行の一人の婦人が、グノーのアベマリアをアカペラで歌われました。素晴らしい美声が堂内に響き、海外の巡礼者たちも聴きほれた様子でした。

この教会の庭内には、あの「ベデスダの池」がありました。

午前中のミサで朗読されたヨハネ福音書のイエス「ベドサタの池で病人をいやす」の個所の場所なのでした。ヨハネ 5:1 - 18

ヘロデ大王が作ったとされ、この池で、ソロモン神殿にいけにえとして捧げる羊を洗うために使ったとも、池には5つの回廊がありそこで、さまざまな病気の治癒のため病人が並んで沐浴をしていた場所とのことでした。

ヨハネ福音書の記述通りの5つの柱廊が発掘されていました。発掘されたベデスダの池および石造の建物群は、現在の地表より10メートル以上低く、聖アンナ教会の敷地の半分以上を占める、結構大きなものでした。

聖アンナ教会を後にして、いよいよ、イエスがピラトから死刑判決を受け、あの重い十字架を担いで処刑の行われたゴルゴダの丘までへの道を辿ります。

道中のイエスの味わった苦難を偲んで、ヴィア・ドロローサ(悲しみの道)、またはヴィア・クルシス(十字架の道)と呼ばれています。

ヴィア・ドロローサの起点は、総督ピラトの前に引き出され、死刑判決を受けたアントニア要塞・総督官邸のあったとされる現在のエル・オマリア・スクールの校庭です。

ベデスダの池からはすぐ近くでした。イエスの時代、総督官邸の南側、現在の「神殿の丘」には、ソロモン神殿がありました。神殿の丘を取り囲むようにソロモンの回廊があり、今は「嘆きの壁」がその一部として残っています。

イエスがエルサレム入城するに東中央の、今は閉鎖されている黄金門から神殿に入っただろうし、神殿の前の総督官邸、そしてベデスダの池にも立ち寄り、病人を癒す秘跡を行ったのだろう。

イエスは、シオンの丘での最後の晩餐の後、オリーブ山の麓のゲッセマネの園で捕らえられ、再びキドロン深い谷を越えて、シオンの大祭司カヤパ（カイアファ）邸の地下牢へ引き立てられました。イエスの僅か数日間のエルサレム滞在は、当時、エルサレムの西の端の城外であったゴルゴダの丘の十字架で終焉を迎えました。

ムスリム地区を西に向かって、緩やかに登って行くヴィア・ドロローサは、狭い石畳の道でした。14世紀フランシスコ会がローマ教皇からエルサレム管理を命じられ、1342年にヴィア・ドロローサがはじめられて今日に至っているとのこと。アッシシのフランシスコが活躍した時代から130年後のことでした。

石畳の道は、千数百年の人々の歩みが岩の表面を削ったためか、つるつる滑りまったく歩きにくい道でした。

ムスリム地区を通じて両側に土産物屋が並ぶバザールの雰囲気を通り、世界中から訪れた巡礼者たちの列が続き、喧騒の場でもありました。

3月28日は、四旬節に入って、「主の受難」の17日前、聖週間に入る2週間前という時期が影響したのかもしれませんが。

道に沿って、イエスにまつわる出来事を記念した14のステーション(日本語では「留」)が設けられ、それぞれに教会あるいは修道院が設けられていました。

全行程約1キロメートルで、オマリア・スクールの校庭が第1ステーション、毎週金曜日午後3時頃に始まる十字架の道行きの起点とされています。

私たちは、巡礼者で混雑している第1ステーションは避けて、イエスが有罪とされ鞭で打たれ、十字架を担がされたとされる第2ステーションのフランシスコ会宣告の小聖堂からスタートしました。ヨハネ19:1-16

時々、道の隅に寄ってガイドの方からの説明を受けました。イバラの冠をかぶらされ、紫の服を着せられたイエスの姿を思い浮かべながら、主の受難の意味とピラト、祭司長、ユダヤの群衆たちの意図のことを考えずにはられませんでした。

「イエス、十字架の重みに倒れる」第3ステーション(ポーランドカトリック教会)、
「母マリアがイエスを見る」第4ステーション(アルメニアカトリック教会)、
「キレネ人シモン、イエスに代わって十字架を担ぐ」第5ステーション(フランシスコ会礼拝堂)、

「ベロニカ、イエスの顔を拭う」第6ステーション(イエスの小さき姉妹会修道院)と歩いたところで、巡礼グループは二つに別れました。

第7~9ステーションへの道が少々急で厳しいため、そのまま行く組とパスする組に分かれました。

私は、20年前の脳出血の後遺症のため右足が麻痺し重いため、4名のパスする組に入りました。パス組は、そのまま聖墳墓教会への道を直行しました。聖墳墓教会の入り口、前

庭の階段にしばらく座って本隊の皆さんを待ちました。

第 10～14 ステーションは聖墳墓教会内でした。

「イエス、衣を脱がされる」第 10 ステーションは、教会入り口横の「ゴルゴダの丘」とされる、ローマ・カトリック小聖堂でした。

「イエス、十字架に釘付けされる」第 11 ステーションは、入り口右にある急な階段を上った所にローマ・カトリックの釘付けの祭壇がある所でした。

「イエス、十字架上で息を引き取る」第 12 ステーションは釘付けの祭壇と隣接する、ギリシャ正教会の小聖堂の祭壇。磔にされたイエスのイコンがあり、祭壇の下の岩、印がある所が磔になったイエスの十字架が立てられ、息を引き取った場所とか。

マルコ 15 : 33 - 41 イエスの死(マタイ 27 : 45 - 56、ルカ 23 : 44 - 49 ヨハネ 19 : 28 - 30)

「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」

「イエス、十字架から降ろされ、マリアが亡骸を受け取る」

第 13 ステーションは、釘付けの祭壇とギリシャ正教会の小聖堂の間、スタバト・マーテルというイエスの死を嘆くマリアの小祭壇があるところ。母マリアがイエスの亡骸を受け取ったと伝えられているところでした。

ゴルゴダの聖堂北側の階段を下りた所に、畳ほどの大きさの赤い大理石板がありました。十字架から降ろされたイエスに香油を塗った所でした。

多くの女性の信者が、身に着けた布地で香油の匂いを取るために大理石の表面を拭いていました。そのため、赤い大理石は黒光りしていました。

イエス、「墓に葬られる」第 14 ステーションはヴィア・ドロローサの終点。

イエスの時代には洞穴だったとされる、イエスが墓に収められた所。

聖墳墓教会の中央奥のドームの下、「天使の礼拝堂」の奥の入り口からイエスの墓はいに入れるが内部に入れるのは 2～3 人程度なので、復活聖堂を長蛇の列が囲んでいました。私たち一行は到底、待つ墓に入る時間の余裕がなかったので、聖堂前で祈る他ありませんでした。聖墳墓教会の中で最も重要な場所に入れなかったのは残念でした。

昨日、プライベートミサを行った聖墳墓教会が、この度の巡礼の最も重要な場所でした。キリスト教徒地区の南部地区、アルメニア地区に接する地区に位置する聖墳墓教会は、巡礼者の列の絶えない場所、それぞれの人がキリストを思い、キリストを体験する場所でした。

この地に最初に教会を建てたのも、ローマ皇帝コンスタンチヌスの母ヘレナ。熱心なキリスト教徒で、326 年に聖地を巡礼しベツレヘムの生誕教会など多くの教会を建てました。

336年に完成したこの聖墳墓教会もそのひとつ。その後十字軍時代の1099年に大幅に修復、増改築され、1808年に大破、後に再建されたとのことでした。

現在の教会の内部は大きく分けて、中央のバシリカ、マンチュリオン(殉教聖堂)、とイエスの墓のあるアナスタシス(復活聖堂)に分けられます。さらに地下には、見事なモザイクが残っている聖ヘレナ聖堂がありましたが、通過しました。

ヴィア・ドロローサと聖墳墓教会巡礼を終えたころもう夕方でした。そこから、エルサレム旧市街の南東側のユダヤ人地区の通りを南へ歩いた、これまでのムスリム、キリスト教徒、アルメニア地区と比較して、静かな、雑踏のない清潔な街並みでした。

そこに発掘された、地下の古い遺跡が保存されていました。

そのひとつに、ユダヤ教の聖地「嘆きの壁」のある所に下りる階段上の道路を横に入った所にバート・ハウスと呼ばれる遺構がありました。1970年に道路地下6メートルで発掘された、第2神殿時代(紀元前515年～70年)の邸宅跡でした。

その邸宅跡から下りた一段低いところに「嘆きの壁」とその前の広場が広がっていました。

「嘆きの壁」の上には「神殿の丘」が広がり、ひときわ目立つ黄金の大きな「岩のドーム」が建っていました。

神殿の丘は、アブラハムがわが子イサクを神にささげようとしたモリヤの丘とされています。また、ソロモンの神殿があった場所とされ、ダビデが神の契約の箱を置いたところともいわれているとか。

現在残っている神殿の土台部分は、ヘロデ大王により紀元前20年に建てられたもので、イエスも訪れた神殿と思われます。その第2神殿は、ローマとの第一次ユダヤ戦争の時、ティトス將軍によって破壊されました。神殿崩壊はユダヤ教の、その後のあり方を決定的に変えたといわれます。神殿を中心とした宗教から、モーゼ五書の律法・トーラに則った儀礼、食物規定、日常生活の倫理綱要が励行される宗教となったのです。613の規定があるとか、その象徴が安息日と割礼の遵守です。

嘆きの壁に通じる通路では、テロ防止のため、イスラエル兵による手荷物検査が行われていました。私たち一行も広場に入りましたが、私自身は、壁に近づくことはためらわれ、中に入らないで早々に出口に待機しました。

現在の壁の高さは21メートル。下から7段目までは第2神殿時代のもので、その上の4段がローマ時代付け足された部分でさらにその上にイスラム王朝時代の石が積まれていて、地下には第2神殿時代の石が17段埋まっているとか。

ディアスポラの歴史を背負う、ユダヤ人の苦難を象徴するような嘆きの聖地でした。

そこからすぐ近くの糞門を出て、バスに乗りました。一路、テルアビブ・ベングリオン国際空港へ。途中、ガイド氏の好意で、弁当の夕食の予定が変更で、ローカルレストラン

でゆっくり夕食が取れました。

午後7時に予定通り空港着、スムーズにチェックインおよび出国検査を済ませ、午後11時の大韓航空にてテルアビブを発ちました。

3月29日午後3時20分ソウル、仁川空港到着、そこで、今回の巡礼旅行一行は解散しました。短い期間でしたが、貴重な、豊富な聖地巡礼を体験をした仲間として、別れを惜しみました。私たち夫婦は関西国際空港に夜9時前に無事到着、その日中に帰宅できました。

※ヨーロッパ聖地巡礼センターより、[巡礼証明書 PILGLIM CERTIFICATE イスラエル巡礼の旅 2017年3月23日～3月29日]をいただきました。

<イスラエル巡礼を終わって>

7日間の巡礼、実質5日間でしたが、中身の濃い、目一杯イエス キリストの歩いた道を辿った旅行でした。旅行中、私の歩いた歩数は64,373歩でした。36キロメートル位、よく歩けたなと驚いています。

主催旅行社のコミュニティワールド社の現地提携社、とりわけ極めて有能なユダヤ人日本語ガイド氏の臨機応変の働きが、5日間を充実したものにしてくれました。空港出迎えから、最後、出国まで1人で、ガイドしてくれました。ほぼ完璧な日本語(スペイン語、英語も堪能なようでした)と豊富な知識、教養、それに偏見のない安定した人格に引き込まれました。ディアスポラで東欧に流れたアシュケナージ系ユダヤ人で、祖父の時代移住したアルゼンチンで育ち、イスラエルに帰還した人。日本にも留学した経験の持ち主で、1年間の大阪外国語大学での日本語研修後、関東の芸術系大学の大学院に2年間学んだとのことでした。大阪外大は、現在大阪大学に統合されましたが、ガイド氏留学当時は家内も関係していましたので、話が弾んだようでした。そのためか、親日的でもありました。

テルアビブ、ガリラヤからエルサレムへの全行程のバスのドライバー氏もユダヤ人で、無口な方でしたが、大柄の包容力のある人物でした。パレスチナ自治区のベツレヘムには、ガイド氏が入れないのでドライバー氏1人の的確な判断で、緊張感のなか無事巡礼を終えられました。最後、空港で別れの時握手した時の大きな分厚い手の温もりは忘れられません。お二人のユダヤ人に接して、改めてその民族的な優秀性を認識しました。

巡礼後、過ごした今年の聖週間、復活祭は、とりわけ意義深いものでした。

キリストの十字架での死と3日後の復活に示された福音の意味とは？

ゲッセマネの園で捕らえられ、ピラトの前に引き出され、ゴルゴダの丘までの道、その現地を見た衝撃は、大でした。

また、帰国後、読み直した遠藤周作の「イエスの生涯」、頭に染み込むように理解されました。一つ一つの情景が思い浮かびました。

私たちの海外巡礼旅行は、2014年1月、厳冬のポーランド、スロバキア、ハンガリーの一回きりです。コルベ神父の足跡とアウシュビッツを見たことが、キリスト者としての私たちに大きなテーマを突きつけました。キリスト教とは、何なのか？

それまでに訪れた、スペイン、イタリアの教会、とりわけ2013年の春訪れた、ローマ ヴァチカン、復活徹夜祭のアッシジと、東欧・ポーランド他のキリスト教には相違を感じた参りました。

2015年、東欧から東方キリスト教への興味があつて、ロシアを旅行しました。スターリンの弾圧を生き抜いたロシア正教の教会とミサを垣間見ることができました。イコンの掲げられた教会の雰囲気は、ローマカトリックとは、随分異なりました。ドストエフスキーのカラマーゾフ兄弟のアリョーシャやゾジマ長老の世界がありました。

今回のイスラエル・エルサレム巡礼旅行での私の問題意識は、西欧的なキリスト教と東方教會的なキリスト教が現に存在しているが、聖地エルサレムではどうなのかとうことでした。

キリスト教の成立は、ローマ帝国と密接に関連します。イエスの時代、事実上のローマ植民地となっていたイスラエルの地に、イエスは現れ、ユダヤ教内での革命的行動を取り、結局、十字架に架けられ無残な殺し方をされました。

ユダヤ教のパリサイ派、サドカイ派、エッセネ派などの諸宗派に対して、対立的で、基本的な律法を否定した初期キリスト教は、ユダヤ人から「異邦人」に向かわざるを得なかった。結果的にユダヤの地から、世界宗教への広がりをもつことになりました。その背景に、ローマとユダヤ人の対立が、特にキリストの十字架後に激化したことがあります。

紀元70年前後の第一次ユダヤ戦争、132年からの第二次ユダヤ戦争でユダヤは敗北し、ユダヤ教神殿は徹底的に破壊され、エルサレム自体も破壊されました。その以降、ユダヤ人のディアスポラ・離散が始まります。ユダヤ教も信仰の拠り所であったエルサレム神殿を無くして、トーラ中心の宗教活動にならざるを得なくなりました。それは、今日まで続いています。

初期キリスト教は、ペテロやパウロを経て、ユダヤ人には広がらないで異邦人へ、小アジアからギリシャ、ローマ、あるいは北アフリカ、アジアに伝播しました。ユダヤ教に対立的であったために、迫害されながらもローマ世界に浸透していきました。313年、コンスタンティヌス帝は、ミラノ勅令を出しキリスト教の公認をします。母、ヘレナが熱心なキリスト教徒であったことは前述のとおりです。そしてテオドシウス帝の392年、ローマ国教に昇格し他宗教は禁止されます。この頃、ローマの中心は東ローマ、ビザンチン(コンスタンチノープル)に移っています。テオドシウス帝の後、ローマは完全に東西分裂します。

476年には、イタリア、ラヴェンナ陥落によって西ローマ帝国は滅亡します。ゲルマン民族のゴート族の侵入によるものでした。コンスタンチノープルを中心とする東ローマは、その後、1453年まで、約1000年間持ち堪えます。西ローマ最後の都、ラヴェンナの教会、サン・ヴィターレ聖堂はビザンチン様式のモザイクに飾られています。すでに西ローマ末期には、コンスタンチノープルが第二のローマとして、帝国の中心であったことを伺いさせられる証拠です。

1453年、難攻不落を誇ったコンスタンチノープルが、オスマントルコの猛攻によって陥落し、東ローマ帝国は滅亡しました。6世紀ユスティニアヌス1世によって建立されたハギア・ソフィア大聖堂は、アヤ・ソフィアとしてイスラム教のモスクに改装され、モザイクのキリスト像も漆喰で覆われてしまいます。キリスト教=ギリシャ正教は、キエフを経てモスクワに、ロシア正教として根づいて行きました。象徴的にイヴァン雷帝の美しいネギ坊主型ドームを持った聖ワシリー聖堂が、赤の広場に面して現存しています。ビザンツ帝国の鷲の紋章(いわゆる双頭の鷲)をロシアは引き継ぎ、モスクワはコンスタンチノープルに続く第三のローマを称することになります。

そして、聖地エルサレムといえば、すでに638年、アラブ・イスラムの支配するところになっております。6世紀ユスティニアヌス帝のときに最大版図を誇ったビザンチン帝国は、小アジアまで引いておりました。イスラム教のムハマドは、570年ころ生まれ、610年頃アラビアのメッカで啓示を受けました。ムハマドは、啓示を受けるまでは、商人として隊商を組んで度々、豊かなシリア(地中海東端の地域全体でダマスクスが中心)に出かけました。エルサレムにも寄ったことと思いますが、632年には没しています。エルサレムの岩のドームは、アラブ軍のエルサレム征服の記念に691年に建てられています。ユダヤ教のソロモン神殿は紀元70年にローマにより破壊されていますから、その神殿の丘跡地に建てたのでしょう。そして、十字軍時代を除くと、アラブ・イスラム、トルコ・イスラムとイスラム系の王朝がエルサレムの支配を行ってきました。それは、第1次大戦でオスマントルコが崩壊する20世紀初頭まで続きます。ここで、指摘しておきたいのは、イスラム教権力の下で、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教が、聖地エルサレムでは1300年近く宗教的な

共存を実現してきたという事実です。イスラム教の本来的に持ってきた寛容さを評価したいと思います。

この度、イスラエル、エルサレムを巡礼して気づいたことは、エルサレムの教会等の遺構は、4～5世紀以降のものになりますが、ビザンチン様式のモザイクが施されているものばかりでした。西欧の、たとえばサン・ピエトロの様式とは別という印象でした。聖墳墓教会を始めとしてビザンチンのギリシャ正教の様式が圧倒的だったということです。旧エルサレム地区の4分の1は、アルメニア地区が占めていました。また、アルメニア正教、エチオピア正教、ロシア正教などの教会もありました。ローマカトリックと聖地との関わり方は、フランシスコ会が中心という印象でした。

キリスト教と、聖地エルサレムの関連を考える場合、私は、長らく西欧に偏った、トルコ、ギリシャ、ローマ、そして西欧という東西軸で考えてきました。この数年は、ローマ帝国とイスラム諸王朝の変遷を考えればむしろ、北アフリカ、シリア、トルコ、バルカン半島からアルメニア、ハンガリー、ウクライナ(キエフ)、ロシア(モスクワ)の南北軸を重要な要素として考えなければ理解できないという思いにとらわれてきました。

エルサレムは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教第三の聖地とされて、現在、三者は対立関係を宿しながらも平和共存しています。三者は、アブラハムを共通の祖とするセム系諸部族に繋がっています。そして、モーゼ五書を含むキリスト教でいうところの旧約聖書を、三つの宗教が拠り所としています。さらに、この三つの宗教は、一神教で、砂漠を拠り所とするとされています。

今回の巡礼を経験して、いわゆる律法を否定したキリスト教は砂漠の宗教と言えないのではと思いました。キリスト教は異質です。イエスは、ユダの荒野で洗礼者ヨハネから荒野を流れるヨルダン川で洗礼を受けました。そして、死海に近い荒野で40日間の修行をしましたが、結局、ヨハネのもとを去り、ガリラヤの地に帰って伝道活動に入ります。そして、ミゼーレコルディア、愛と慈しみと神の正義を説いてまわりました。イエスの原点は、緑豊かな、花々咲くガリラヤの地で、病気の人、とりわけライ病とかで不可触賤民に貶められた人たち、あるいは差別された女の人たちの目線でした。そして、何よりも平和を望んだ方でした。厳しい律法は、砂漠の民族であるアラブ、ディアスポラの苦難を背負ったユダヤの人たちには必要であったが、乳と蜜の地のキリスト者には、優しい神が必要だったのではないかと思います。

キリスト教は、約500年周期でその性格を変えてきました。最初は、ローマ帝国とイスラム教の関わりによって、次はアッシジのフランシスコの出現によって、次は、いわゆる宗教改革のうねりによるものです。現フランシスコローマ教皇は、2015年を大聖年とし、ミ

ゼーレコルディアを説かれました。1000年前のアッシジのフランシスコに帰り、イエス・キリストとともに歩もうということだと理解しています。フランシスコ教皇に私は、1000年ぶりの変革の気概を感じます。ローマカトリックは、重大な危機に瀕しています。その克服のために、全てのキリスト者は、カトリックもプロテスタントも、東方の各正教も、イエスキリストの「ミゼーレコルディア」の原点に帰ることしかないのではと思います。くしくも2017年は、ルターの1517年の「宗教改革」から500年目です。

以上